



Title	大気汚染を通してみる中国近代化の「圧縮性」：リスクをめぐる規制と分配を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	王, 瞻
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第13778号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/76078">http://hdl.handle.net/2115/76078</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Wang_Zhan_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：王 瞻

### 学位論文題名

大気汚染を通してみる中国近代化の「圧縮性」：

リスクをめぐる規制と分配を中心に

ウルリッヒ・ベックは、リスク社会論において、西洋社会が、伝統社会から産業社会である第一の近代を経て、リスク社会である第二の近代に至る経験を、連続的な近代化のモデルとして抽出した。他方、リスク社会論を補完し、西洋以外の社会における近代化の進展とその特徴を検討する試みとして、圧縮された近代化論が提起されている。しかし、圧縮された近代論の充実と蓄積は、未だ途上である。

本博士論文の目的は、大気汚染がもたらすリスクが、どのように規制され、また、分配されるかという考察を通して、西洋社会では順次に出現した伝統社会、産業社会、リスク社会が、改革開放以降の中国近代化において、いかに同時かつ断片的に存在するか、即ち、中国における近代の圧縮性を明らかにすることである。

第 1 章では、改革開放以降、中国経済は大きな発展を遂げたが、その反面、経済格差と環境汚染が顕在化したという社会的背景を紹介し、第 2 章では、ベックに加えて、アンソニー・ギデンズ、フランソワ・エワルドを援用し、リスク社会論におけるリスクと個人化の概念について、その理論的枠組みを確認した。具体的には、まず、リスクの概念を危険との対比において、「危険は制御が困難あるいは不可能であるのに対して、リスクは原則的には制御可能であることを意味し、人間または社会の行為、意思決定、選択と深い関連を持つもの」として、本論の定義を定めた。続いて、西洋社会が経験した近代化過程における、合理性とリスクの関係の変容を明らかにした後、個人と社会制度との関係を把握するための個人化の概念に基づき、西洋社会における「主観的な個人化」の形成と「客観的な個人化」の構築が、その近代化の経過とともに進んできたという理解を示した。

第 3 章においては、本論のもう 1 つの理論的支柱である、圧縮された近代化論について概説した。最初に、ギデンズとデヴィッド・ハーヴェイを援用し、圧縮という概念の社会学的な意味を確認した。続いて、「相互にかけ離れた歴史的、社会的諸要素が、動的に共存していることで、高度に複雑で流動的な社会システムの構築と再構築が起こっている現象」という、圧縮された近代の概念を解説した。さらに、Chang (2010)、Han (2011)、落合 (2013) 等の先行研究を通じて、圧縮された近代化論が、どのように西洋以外の近代化を取り上げてきたかについて、その特徴を整理した。これらを踏まえて、本章の最後では、西洋以外の社会がリスク社会に突入するまでの過程を分析するために、ベックが提唱した「近代の原理と制度における同時的な非同時性」という検討方法について説明を行った。この提案を受けて、本論では、中国近代化における圧縮性を探求するために、本来は同時に成立することのない近代の原理と制度が、どのように連結し、いかなる特殊な組み合わせを呈しているかを把握することを、本論の分析方法として抽出した。

第 4 章では、本論が研究事例とする大気汚染の基本的な知識、その対応の歴史的経緯につい

て検討した。まず、近代化とともに変化した大気汚染の実態を把握するために、ロンドンスモッグ、ロサンゼルス光化学スモッグ、PM2.5 の 3 つの大気汚染に焦点を当て、西洋社会の近代化過程が経験してきた大気汚染の概要と、その克服の方法について概観した。続いて、現在の中国社会が直面する大気汚染の現状と、その対応策について整理を行った。次の第 5 章においては、中国の社会構造転換の契機である改革開放政策と、それに付随する経済制度及び社会制度の構築、格差問題等の側面から、改革開放以降の中国の社会情勢を理解するための背景を提供した。

第 6 章では、リスク規制の観点から、科学的知見と一次的リスク、社会的合意と二次的リスクという考察枠組みを設け、中国の対 PM2.5 規制の策定過程の検討を行なった。この結果、中国において PM2.5 が規制基準として認識される過程においては、科学的知見が無視され、社会的合意も限定されていることが明らかとなった。つまり、第一の近代における西洋社会のリスク規制とは異なり、中国では、リスクに関する科学的知見が存在しているにも関わらず、それがリスク同定の根拠として用いられていない。また、第二の近代における西洋社会とは異なり、中国では、リスクに対する規制策を制定する過程において、社会的合意の導入に伴う二次的リスクが存在せず、それが国民や社会にとっては危険と化している。結論として、(1) 社会における産業化とリスク化の共存、(2) 複合的な一次的リスクと社会要請に適合しない規制の実施から生まれる危険の混在、(3) グローバルな科学的知見とローカルなリスク制御の不一致という 3 点が、規制という観点から見た中国近代化における圧縮性の現れであることを主張した。

第 7 章では、リスクの分配という観点から、都市への出稼ぎ労働により汚染の被害に遭遇する農民工を取り上げ、彼らの生き方、メンタリティ及びリスク認識 (=主観的な個人化)、彼らを取り巻く社会制度 (=客観的な個人化)、さらに、社会制度と個人との関係 (=客観的な個人化と主観的な個人化との関係) という枠組みを設定し、考察を展開した。その結果、農民工という個人は、精神的には伝統社会に残存しながら、身体は第一の近代に置く都市労働者となり、さらに第二の近代であるリスク社会に生きる個人として、「自己責任」で汚染被害への対処を強いられており、3 つの時代に混在して生きる存在であることが分かった。農民工においては、(1) 伝統社会から産業社会への個人化過程、そして産業社会からリスク社会への個人化過程という、非同時的であるはず個人化の過程が同時に進行している。そして、(2) 産業社会における社会制度の構築と、リスク社会における社会制度の構築の、いずれも農民工階層を適切に救済するには至らない状況にあり、制度による規範と個人の生き方の間には、大きな齟齬が生み出されている。結論として、この 2 点が、リスクの分配という観点に立ち、改革開放政策により出現した農民工に体现される中国近代化の圧縮性であることを主張した。

最後の第 8 章では、これまでの分析及び考察を踏まえ、改革開放以降、中国近代化が経験した「圧縮性」は、即ち、「非同時的であるはずの近代の原理と制度が、同時に組み合わせられる現象」であるという結論を導いた。中国では、改革開放以降、科学的合理性は富の創出のための経済成長に採用されてきたが、それが中国政府によるリスク規制には有効に使われておらず、むしろ、国民国家という枠内に構築されている規制制度は、国民の社会的合理性の制限と、第二の近代におけるリスクの国際的規制のもと、空洞化している。また、PM2.5 のような新しいリスクが出現する中、自己責任という第二の近代の原理だけが強制されており、第一の近代の社会福祉制度に十分に組み入れられていない農民工階層は、リスクに遭遇する際に、伝統な中間集団や社会制度に頼ることしかできないという、本来非同時であるはずの近代の原理と近代以前の制度の組み合わせが出現している。即ち、本来、西洋の歴史的時間では順次に出現した原理と制度が、その歴史区分とは異なる組合せで同時に出現することが、中国近代化の圧縮性の現れなのである。